

「探究型研修」の整理

独立行政法人教職員支援機構

審議役 佐野 壽則

「探究型研修」の整理① (石井英真氏の論文)

さて、研修での学びを、「研修目標」「研修内容」「研修過程・方法」という三つの観点から考えることは、教職員研修を組み立てたり評価したりする際の有効なツールになり得るという確信を深めていく中、次に考えたのは、次年度つくりかたとして、探究型の「コア研修」を、どのような性格の研修として整理するかということです。

夏に教育委員会を訪問したとき、「コア研修のようなことは、私たちのところでもすでに行っていますよ」というコメントも、「なるほど」と思いつつも、「もしかしたらコア研修は、自分や他者の価値観に気付くことを大事にする点で、教育委員会の研修と『質的』に違うものになるかもしれない」と思ったことは、紹介した通りです。

このときの直感を大事にしつつ、「コア研修は、NITSがこれまで行ってきた中央研修とも、教育委員会が行っている指導・助言研修とも違いそうだ、どう整理すればいいの

だろう……」と考えを巡らす中で出会ったのが、石井英真京都大学准教授の論文です！。何度読み返しても新しい発見がある論文で、当時「あーでもない、こーでもない」と昼夜考えていた私に、一筋の光明を与えてくれました。

詳しくは、論文をご参照いただければと思いますが、この文脈で、私なりの理解で、とりわけ「なるほど」と思ったのは、以下の点です。

- 教師の資質能力の向上には次のような二つの志向性が見られる。
- ①一つは、既存の手法や考え方を前提として、繰り返し同じ教育技術を使ったり、実践を振り返ったりすることで、知識や技能に習熟していくという志向性である。
- ②もう一つは、既存の手法や考え方の枠組み自体を問い直し、教育技術の組み替えや発明を行ったり、自分たちの基本的な想定や価値観を再考しながら実践を振り返ったりする「探

究 (inquiry) 過程」に進む」と、知識や技能を自ら再構成していく志向性である。

「探究」という言葉に、知識や技術に習熟し課題をより素早く解決できるようにすることに止まらない、「そもそも」の前提や価値観を捉え直す意味合いを持たせることができることに気付かされました。

もしかすると、教育委員会が行っている指導・助言研修は、身に付けるべき既存の手法や考え方がまずあり、それらに習熟することを促すものが多く、必ずしも、教職員に、いったん立ち止まって、自身の暗黙の前提や価値観を問い直す機会を提供することを志向するものではないのか。探究型の研修は、後者のような志向性を強く持つ研修だと整理すると、NITSとしてやりたいことが見えなくなるのではないかと思いました。

「探究型研修」の整理② (高校の学習指導要領)

こういった考え方をし始めていることを荒情報の収集↓整理・分析↓まとめ・表現」を通じて、「問題解決的な学習が発展的に繰り返されていく」と書かれています。

ただ、よく読むと、この説明の後ろに、探究している生徒の姿が生きて描かれていることに気付きました。それによると、探究の営みにおいては、生徒は、物事の本質を探つて見極めようとする中、事象を自己の在り方生き方を考えながら捉えることで、感性や問題意識が揺さぶられ、取組が真剣になるとしています。また、課題発見、情報収集、問題解決のプロセスを経る中で、知識・技能の有用性を実感し、見方が広がったことを喜び、更なる学習への意欲を高めるとしています。そして、「このように、探究においては、生徒の豊かな学習の姿が現れる」と締めくくっています。

別の箇所では、「総合的な探究の時間」は、その基底に、自然や社会とのつながりの中で人間としての在り方を真摯に希求することを据えているという記述もあります。

「探究」は、ロジカルにPDCAを回していくということだけでなく、問題解決過程の中で、感性や問題意識の揺れ、見方が広がったことへの喜び、学習意欲の高まりといった情動面の動きを伴いながら、自己の在り方生き方を意識し、課題の本質に向き合う営みだと捉えられていることに気付きました。

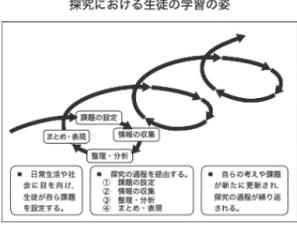
「探究的な学び」の意義

考えてみれば、私たちは大人になれば誰しも、課題を与えられたり見出したりし、調べ物をして情報をまとめ、人に伝え、課題を解

1 総合的な探究の時間の特徴に応じた学習の在り方

(1) 探究の見方・考え方を働かせる

探究の見方・考え方を働かせるということを目標の冒頭に置いたのは、探究の重要性に鑑み、探究の過程を総合的な探究の時間の本質と捉え、中心に据えることを意味している。総合的な探究の時間における学習では、問題解決的な学習が発展的に繰り返されていく。これを探究と呼ぶ。なお、小中学校における総合的な学習の時間では、「探究的な見方・考え方を働かせる」としているのに対して、総合的な探究の時間では「探究の見方・考え方を働かせる」としている。



生徒は、①日常生活や社会に目を向けた時に湧き上がってくる疑問や関心に基づいて、自ら課題を見付け、②そこにある具体的な問題について情報を収集し、③その情報を整理・分析したり、知識や技能に結び付けたり、考えを出し合ったりしながら問題の解決に取り組み、④明らかになった考えや意見などを

まとめ・表現し、そこからまた新たな課題を見付け、更なる問題の解決を始めるといった学習活動を発展的に繰り返していく。要するに探究とは、物事の本質を自己との関わりで探り見極めようとする一連の知的営みのことである。

探究においては、次のような生徒の姿を見いだすことができる。事象を自己の在り方生き方を考えながら捉えることで、感性や問題意識が揺さぶられて、学習活動への取組が真剣になる。自己との関わりを意識して課題を発見する。広範な情報源から多様な方法で情報を収集する。身に付けた知識及び技能を活用し、その有用性を実感する。議論を通して問題の解決方法を生み出す。概念が具体性を増して理解が深まる。見方が広がったことを喜び、更なる学習への意欲を高める。このように、探究においては、生徒の豊かな学習の姿が現れる。ただし、この①②③④の過程を固定的に捉える必要はない。物事の本質を探つて見極めようとするとき、活動の順序が入れ替わったり、ある活動が重点的に行われたりすることは、当然起こり得ることだからである。

瀬理事長に話したところ、「なるほど。そういうことであれば、高等学校の『総合的な探究の時間』の学習指導要領解説が参考になるかもしれません。今回の学習指導要領から、従来の『総合的な学習の時間』を、小中学生は『総合的な学習の時間』、高校は『総合的な探究の時間』と名称を分けているのですが、その違いは、高校生の場合は、『自己の在り方生き方を考える』としているところですよ」という示唆をいただきました。

「探究」のイメージは、「課題の設定↓情報の収集↓整理・分析↓まとめ・表現」という、ロジカルにPDCAを回していくイメージが強かったので、「自己の在り方生き方を考える」という表現が使われているというお話に、少し驚きました。

そこで、『総合的な探究の時間』の学習指導要領解説を丁寧に読むことにしました。やはり、まずバイラルの絵が示され、探究の時間における学習では、「課題の設定↓

決していく行為を行っています。社会人の仕事は、多かれ少なかれ、このようなプロセスの連続ではないでしょうか。

仮にこれを課題解決プロセスと呼ぶならば、より上手に課題解決プロセスを回せるようになることは大事なことはあるものの、そのためのスキルを身に付ける過程を、わざわざ「探究」と呼び、「これからの時代に必要」だと強調する必要は、そこまでないとも思いません。

ただ、「探究」が、課題の本質に向き合う中で、自身の見方が広がったり、自己の在り方が変わったりしていく営みだと捉えるならば、「探究」する学びを大事にすることには、大きな意味があるように思います。

AIが、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現まで行ってくれる状況が出現する中、これからの子供に求められるのは、自分がどこから、どういう思いで物事を捉えているか、自身の視座を意識しながら課題の本質に向き合うことで、課題の設定のされ方自体を問い直せることかもしれません。

自分の在り方が変わっていくことを、怖がらず、面白がり、大事にしようとする感覚があれば、他者の在り方や社会の変化に開かれ、人生を長く楽しめるかもしれません。

そして、それぞれが多様な自身や他者の在り方に開こうとすることで、私たちは、この社会をより豊かなところにしていくけるかもしれません。

教師にとっての「探究」

探究を、自己の在り方との関わりを意識し

て課題の本質に向き合うことだと捉えたと、教師にとっての「探究」は、自身もつ子供観や学習観、学校観などの関わりを意識して、課題の本質に向き合うことだと言えるように思います。

社会が急速に変化し、価値観が多様化する中で、教師が自らの「観」を問い直さざるを得ない局面は増えているのではないかと思います。

「子供を主語とした学び」の実現には、「子供観」、「学習観」の変容が求められ、不登校児童生徒の急増は、教師に「学校観」の見直しを迫っているとも考えられます。教師のウェルビーイングの実現の鍵は、教師（教職員集団）の「幸せ観」の問い直しかもしれません。

ただ、学校現場では、目の前の課題に次々と対応することが求められ、教師が、一旦立ち止まって、自らの子供観や学習観、学校観、幸福観などにじっくり向き合う機会が確保されているとは言い難いのではないのでしょうか。

そう考えると、教職員自身が探究することをテーマとした研修が目指しているのは、教職員が、自らの「観」を発見したり、問い直したりする時間と空間を提供することなのではないかと思いました。そして、そのような研修は確かに、知識や技能を習得する学びとは、「質的」に異なり、「探究型研修」と呼ぶに相応しいと思いました。

「バカの壁」

この頃、たまたま図書館で著名な新書『バ

カの壁』（新潮新書）を借りて読み直す機会がありました。その中で、養老孟司氏は、このようなことを書いています。

ガンになって、治療法がなくて、あと半年の命だと言われると、咲いている桜が違って見える。「変わらない人間と、変わっていく情報」という捉え方が現代社会では一般的だが、実際は反対だ。情報は変わらない。変わるのは人間の方で、知るということは、自分がガラッと変わることだ。昔の人は、学ぶ、学問することは、そういうことだと思っていた。

自身は変わらないままに、その時々で、必要な知識やスキルを獲得する。学ぶとは、そのようなものだと思えることが多いように思います。

ただ、養老孟司氏が言うように、情報は同じでも、情報を受け取る自己の在り方が変わる、そのような学びはあるように思います。そのような学びの捉え方のことを「探究」と呼ぶのかもしれない。そのように思いました。

〔注〕

1 「教員養成の高度化と教師の専門職像の再検討」（〔特集〕教師教育の「高度化」を考える）より

2 なお、小中学校の「総合的な学習の時間」も、「よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目指す」とされ、「自己の生き方」への言及がある。

3 この箇所の記述は、小中学生の「総合的な学習の時間」も、概ね重なる。